

|                  |   |
|------------------|---|
| Title            | 西天阿難功德國と甘巴里國：明とVijayanagarとの交渉  |
| Sub Title        | The kingdom of Hsi-t'ien-a-nan-kung-te (西天阿難功德國) and the kingdom of Kan-pa-li (甘巴里國) : intercourse between Ming (明) and Vijayanagar   |
| Author           | 和田, 博徳(Wada, Hironori)  |
| Publisher        | 三田史学会   |
| Publication year | 1956  |
| Jtitle           | 史学 Vol.28, No.3/4 (1956. 3) ,p.22(300)- 39(317)   |
| JaLC DOI         |   |
| Abstract         |   |
| Notes            |   |
| Genre            | Journal Article   |
| URL              | <a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19560300-0022">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19560300-0022</a> |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 西天阿難功德國と甘巴里國

——明と Vijayanagar との交渉——

和 田 博 德

### 一

Vijayanagar は西曆一三三六年から一五六五年に及ぶ二百數十年間、回教の侵略に抗して、ヒンドゥー教を維持した南インドの大國である。<sup>(1)</sup>しかし、この國は Robert Sewell の著書 *A Forgotten Empire (Vijayanagar)*, London 1900. の題名が示す如く、後世から「忘れられた帝國」となつてしまつたので、未だ知られてをらぬ事實が頗る多い。Vijayanagar と同時代に中國を支配してゐたのは明朝であるが、この二つの大國の間に交渉が行はれてゐた事實についても從來よく知られてゐない。特に鄭和の遠征と Vijayanagar との關係については、これまで問題にされたことさへなかつたので、こゝに明かにしたいと思ふ。

明史 卷三百 西域傳三に西天阿難功德國といふ國について左の如き記述がある。

西天阿難功德國、西方番國也。洪武七年（一三七四）、王卜哈魯遣其講主必尼西來朝、貢方物及解毒藥石。詔賜文綺禪衣及布帛諸物。後不復至。

この記述は明實錄の洪武七年二月戊戌の條に「西天阿難功德國王、卜哈魯遣其講主必尼巴來朝、貢方物及解毒藥石。詔賜文綺禪服及夏布等服」とあるのに基づいてゐるが、西天阿難功德國とは何處にあつた國であらうか。この國については右のやうな簡単な記録しかないので、その比定をするのは頗る困難なことのやうに見える。かくて此の國の所在は既に明代から不明であつたのであつて、萬曆年間の沈德符は野獲編卷三十に於いて、西天阿難功德國とは和林即ち蒙古のカラコルムのラマ僧が朝貢に對する褒賞欲しさに偽造した國名で、實在の國ではなかつたらうとさへ言つてゐるのである。またこゝに見る如く、明史はその位置について、「西方番國也」といふ曖昧な表現をしてゐるに過ぎない。

この難かしい疑問の國に解決の緒を與へたのは有名な東洋學者ブレトシュナイダー (Emil Vasilievitch Bretschneider) 氏で、その名著 *Medieval Researches from Eastern Asiatic Sources*, London 1910 の第二卷二二頁に於いて、西天はインドを指す中國稱呼であり、阿難功德は Vijayanagar の別稱 Anagondy の對音であらうと推定してゐる。これは頗る卓見であるが、西天といふ稱呼と、單なる音の一致のみによつて推定したに過ぎないから、これだけで阿難功德國を Vijayanagar と決定してしまふにはなほ不安であり、疑問が残るやうである。音の相

似した國は Vijayanagar 以外にも他にあるかも知れないし、そして何よりも中國から遙に山河を隔てた遠い南インドの國が如何なる事情で、どの經路を通つて明へ朝貢することが出來たのであらうか。この點について説明する必要があると思ふ。

この説明を試みたのが中國の張星烺氏で、その著「中西交通史料匯篇」第六冊の四九二頁に「明時中國與印度陸上交通」と題して、ブレトシュナイダーの阿難功德國 Vijayanagar 説を採り、この國の朝貢經路を論じて、「明史西天阿難功德國傳」列於烏斯藏之下。其使節之通中國、蓋由陸道經西藏而來也」としてゐる。非常に簡単な説明ではあるが、阿難功德國の朝貢經路については從來これが唯一の見解である。しかしこの見解は正しいであらうか。

張星烺氏が言ふ如く、明史<sup>卷三百三十一</sup>西域傳三は阿難功德國傳を烏斯藏等のチベット諸國の傳の下に載せてゐる。けれどもそれは次の理由からなのである。前掲の明史阿難功德國傳の記述の後には直ぐ續けて左の如くある。

又有和林國師朶兒只怯烈失思巴藏卜。亦遣其講主汝奴汪叔來朝、獻銅佛舍利白哈丹布、及元所授玉印一・玉圖書一。銀印四・銅印五・金字牌三。命宴賚遣還。<sup>〔中略〕</sup>和林<sup>〔3〕</sup>卽元太祖故都、在極北、非西番。其國師則番僧。與功德國同時來貢。後亦不復至。

この記述の典據も阿難功德國傳の基づいた明實錄の洪武七年二月戊戌の同日の條に見えるのであるが、この中、「和林卽元太祖（太宗の誤）故都」以下の文は實錄には無く、明史が和林國師と阿難功德國とを烏斯藏の下に列した理由を辯明するために加へたものなのである。國師は元代にチベット人のラマ高僧が封ぜられた稱號であるから、和林國師の朶兒只怯烈失思巴藏卜とはカラコルム駐在のチベット人ラマ僧であつて、明史の辯明は和林（カラコルム）は極北にあ

り、西番(チベット)ではないけれども、その國師が番僧(チベット僧)である故、これを烏斯藏の下に列し、また阿難功德國は實録の同日の條に和林國師と並べて、來貢記事があるから、兩者を並記したといふのであらう。これによつて、明史が阿難功德國を烏斯藏の下に列したのはこの國がチベットを経て朝貢したからでないことは明かである。

されば張星煊氏の如く明史が阿難功德國傳を烏斯藏傳の下に列してゐるといふ理由によつて、Vijayanagar がチベット經由で朝貢したと言ふことは出來ない。それはカラコルムの和林國師が烏斯藏の下に列してあるから、チベット經由で朝貢したとなすことの不可能であるのと同様であらう。こゝに於いて我々は阿難功德國即ち Vijayanagar が果して南インドからチベットを経て朝貢したのか否かを別に検討し直さなければならぬ。それには先づインド・チベット方面の當時の事情を考慮する必要がある。

### 三

西天阿難功德國が明へ朝貢した洪武七年(一三七四)當時のインドは半島南部に據つて、ヒンドゥー教を保持する Vijayanagar の北方に數多の回教國が割據してゐた。即ちデリー(Delhi)に君臨するトグルク(Tughluk)朝を首め、ベンガル(Bengal)・ゴンドワナ(Gondwana)・ブーマニ(Bhamani)等の諸國はその主要なものであつて、何れも Vijayanagar の朝貢使節がインド半島を北上して、チベット經由で中國へ赴くとすれば、その途上通過しなければならぬ國々であり、就中、ブーマニ國は Vijayanagar の北に隣接する強國で、常に異教徒として相抗争してゐた間柄である。<sup>(4)</sup>ヒンドゥー教の Vijayanagar の使節がこれら多くの敵對する回教諸國の間を突破して、チベットに入ること

は凡そ不可能なことであらうと思はれる。まして、これらインドの回教諸國はベンガル國を除いて、明に朝貢した國は一つもないのである。そしてベンガル國の朝貢は後の永樂年間に始まり、且つ、その経路はチベット經由の陸路でなく、常にベンガル灣から南支那海を経る海路であつたことはペリオ (Paul Pelliot) 氏が既に論じたところである。<sup>(5)</sup>これはインドから中國へ赴くのに、明初に於いてはチベット經由の陸路よりも海路の方が容易であつたことを示すものである。更に明のチベット經營は洪武四年から緒に就いたが、阿難功德國の朝貢を見た洪武七年の頃は明史の烏斯藏傳によつて、未だインド境のチベット奥地まで、その招撫が及んでゐなかつたと推察し得ることなども考へ合はせると、Vijayanagar が早くも洪武七年にチベット經由の陸路で朝貢したとする張星烺氏の説は愈々成立し難いことが判明すると思ふ。

インドから中國へ至る陸路にはチベット經由の外に、なほ西北方ヒンドゥークン山脈を越えて中亞を経る佛教東傳の古來の大道と、ビルマ・雲南經由の路とがある。しかし中亞は當時、かの有名なチムールが支配する處で、チムールの明への遣使は洪武二十年(一三八七)に始まり、それ以前には未だ兩國間の交渉は杜絶してゐたのであるし、<sup>(6)</sup>また雲南が明の領域に入つたのは洪武十四年で、滇緬邊境地方にまで勢の及んだのは更に遅く洪武末年以後のことであるので、<sup>(7)</sup>何れも洪武七年に於ける Vijayanagar の中國への通交路としては到底利用し得なかつたらうと考へられるのである。

松本信廣先生の「江南踏査」(三田史學會、昭和十六年刊)の中には先生が昭和十三年に南京古物保存所で調査された洪武十六年、杭州靈隱寺住持釋來復撰、日本沙門釋中巽書「西天善世禪師班的達塔銘」といふものの原文が載せてある。<sup>(8)</sup>これは洪武十四年に中國で歿した善世禪師といふインド僧の墓誌銘であるが、明初の頃の中國インド交渉の資料にな

る。その中に禪師がインドより中國へ來た路程について、「從信度河至突厥、徧歷屈支・高昌諸國。其國王臣喜師至者、無不稟受戒法。凡四閱寒暑、始達甘肅。實元之至正甲辰歲也。元主聞師道行、召至燕京」とある。この中の信度河は Sindhu 河、屈支は Kucha、高昌は Turfan であるから、これによると、善世禪師はインドから中亞經由の陸路を通つて來たわけであるが、中國に着いたのは元の至正甲辰歲即ち至正二十四年（一三六四）で、元末のことである。

周知の如く、蒙古人の征服は東西陸路交通を容易にし、元一代の間、陸路を通つて東來した西人の數は頗る多かつた。しかし元の滅亡後、明が代るや、塞外との關係を絶つて、關を閉ぢ、また陸路交通は斷絶したのであつて、その状態は例へば明史<sup>卷三百二十六</sup> 拂菻（ビザンティン帝國）傳に「元末、其（拂菻）國人、捏古倫入市中國、元亡、不能歸」とあるやうに、元末、中國へ來た西人には明初になつて、歸ることが出來ず、居留を餘儀なくされた者があつたことなどによつても知られるのである。従つて、前述の善世禪師の如く、元末まではインドから中亞經由で中國へ來ることも出來たであらうが、明代に入つてからは、そのやうなことは不可能になつたと考へなければならぬ。

以上の如く元滅亡後、明初に陸路交通は途絶えたが、これに反して海路交通は元代に引續き依然として行はれたのであつて、明の太祖は即位後、間もなく多數の南海諸國へ招諭の使臣を派遣してゐる。その南海諸國の中に西洋といふ國があるが、これが何處であるかについては山本達郎博士が「東西洋といふ稱呼の起原について」（東洋學報二二〇一）なる論文で明かにされてゐる。博士はこの論文の中で、汪大淵の島夷誌略やイブン・バットータ (Ibn Batuta) の旅行記等によつて、元末・明初の頃の西洋とは Vijayanagar の勢力の下にあつて、支那船の常に往來してゐた所の南インド沿岸地方を指した名稱であらうと言はれてゐる。<sup>(6)</sup> この推定は後に桑田六郎博士（「明實錄より見たる明初の南洋」、臺北帝大

史學科年報四、四三四頁)や、杉本直治郎博士(「元代南海における貿易品としての西洋布」、史學研究五六、一六一七頁)によつても賛成せられた如く、正に鐵案であると思ふ。

明實録を見ると、洪武二年(一三六九)正月に西洋諸國を、洪武三年六月には西洋瑣里を招諭したといふことが記されてをり、この招諭に對して、洪武三年九月に西洋國王別里提、洪武六年正月に瑣里國王卜納的といふ者がそれぞれ明に朝貢してゐる。かくの如く明初の洪武二年から六年にかけて、海路を通じて、Vijayanagar 勢力下の南インド地方との間に交渉が行はれてゐた明かな事實があるのであるから、洪武七年に朝貢した阿難功德國が Vijayanagar であるとすれば、これら南インドの西洋諸國朝貢の事實と連關があるもので、同じ海路によつて通交したと考へるのが最も妥當ではなからうか。

なほ、明實録によると、洪武年間に招諭した南海諸國は安南・眞臘・暹羅・占城・蘇門答刺・爪哇・彭亨・百花・三佛齊・渤泥・西洋等の諸國であるが、西洋以外は何れもスマトラ以東の地であつて、西洋のみがインド方面に當ると思はれる。即ち太祖の招撫した國々の中で、西洋は最も遠隔の地なのである。かゝる遠隔の地に太祖が明初早くも招撫を行つたのは何故であらうか。元末順帝の至正三年(一三四三)頃、カリカット(Calicut)、キロン(Quilon)等の西洋に當る地方を訪れたイブン・バッターは當時、この地方へ多數の中國船が往來してゐたことを傳へてゐる。このやうな事情はほゞ同時の汪大淵の島夷誌略によつても窺はれ、前述の山本博士の論文にも述べられた所である。

元末に於けるかくの如き盛んな中國船の南インド往來は當時、この地方が物資豊富で、インド洋貿易の焦點に當つてゐたためであり、また唐宋以來、次第に海上交通の發展した結果であつて、この情勢は明代になつても變化なかつたで



あらう。かくて太祖は即位早々、西洋の如き遠隔の地に招諭の使臣を派遣し、Vijayanagar もこれに應じて朝貢できたものと考へられるのである。

以上によつて、西天阿難功德國が Vijayanagar であること及び、その朝貢経路がほと明かになつたと思ふ。それでは阿難功德國王のト哈魯とは何人を指すのであらうか。Vijayanagar 初代の國王 Harihara I が一三五〇年（元の至正十年）に歿すると、その弟 Bukka が嗣いで、第二代の王となるが、その治世は一三七九年（洪武十二年）まで續いたと言はれる。<sup>(11)</sup> だから洪武七年（一三七四）に遣使朝貢した阿難功德國王のト哈魯とはこの Bukka であるに相違ない。西紀一五三五年頃 Vijayanagar を訪れて、この國に關する記録を残したポルトガル人 Fernao Nuniz は Bukka を Bucarao (Bukka Raya 即ち Bukka 王の訛) と記してゐるが、<sup>(12)</sup> 或はこのやうな音を現はしたものでなからうか。

また前述の瑣里國とは Soli 即ち Chola の對音であるとい一般に信ぜられてゐる。<sup>(13)</sup> しかし、Chola は十、十一世紀に全盛となり、南インド全體を支配した大國であるが、十三世紀には分裂したので、明初には既に滅亡後、百年も経つてをり、存在してゐなかつた國である。だから、當時 Chola と稱して、明へ通交した國は恐らく嘗ての Chola の名聲を擬稱して、自らその後繼者を主張したものと思はれる。それは清初の滿洲が後金と稱したのと同巧異曲であらう。而して、かゝる主張を行ふやうな國は南インドに於いて、當時 Vijayanagar 以外には考へられない。その國力、領域の大きさ等に於いて、Vijayanagar は正に大國 Chola の後繼者と稱して差支へないものである。洪武年間に朝貢した西洋諸國の中で、國名の現れてゐるのは瑣里國だけであるといふのも、この國が當時、他よりも冠絶した地位にあつたことを示すものではあるまいか。然りとすれば、洪武初年、Vijayanagar と明との間には可成りの交渉があつたこ

とが知られるのである。

#### 四

西天阿難功德國の朝貢は洪武七年以後、明實錄に記されてゐないし、明史の阿難功德國傳の最後にも「後不復至」と明記してあるから、この國は洪武七年以後には入貢しなかつたやうに見える。これは元來、明の太祖の南海諸國招撫が消極的なもので、諸蕃の入貢の度重なる事をも好まず、洪武二、三年以後は南海諸國に對する使者の派遣を全く行はず、洪武七年には遂に市舶司を廢してしまつたので、その結果であらうと思はれる<sup>(H)</sup>。しかしこれより以後、果して明と Vijayanagar との交渉は完全に絶えてしまつたのであらうか。

こゝで考へて見なければならぬのは永樂年間に於ける有名な鄭和の南海遠征についてである。洪武年間の南海招撫によつて、Vijayanagar の朝貢が行はれたことが判明した以上、それより遙に大規模な南海招撫であつた鄭和の遠征が Vijayanagar との交渉を齎さなかつた筈はないと考へられる。東洋史上稀に見る事蹟として鄭和の遠征に關しては内外の學者によつて、幾多の優れた研究が發表されたが、鄭和の遠征と Vijayanagar との關係に觸れたものは一つもない。

周知の如く、成祖永樂帝が即位すると、南海諸國に對する洪武帝の消極的方針が一變して、有名な鄭和の南海經略が行はれた。永樂から宣德にかけて前後七回、鄭和の率ゐる二萬七・八千人の大艦隊が東は爪哇から西はペルシア灣のホルムズ Hormuz に至る間を往來し、遠くアラビア、アフリカ方面の諸國をも招諭した。かくの如く鄭和の艦隊の行動

は頗る廣大な範圍に及んだけれども、その主要なる目的地は何所であつたらうか。山本博士の研究によつて知られる如く、それは當時インド洋貿易の要衝であつた南インド沿岸地方、即ち中國人の言ふ西洋であつたのであつて、さればこそ鄭和の往使は「下西洋」と呼ばれ、その船舶は西洋寶船等と稱せられたのである。<sup>(15)</sup>

それであるから南インド沿岸の加異勒 (Kayal)・小葛蘭 (Quilon)・柯枝 (Kochin)・古里 (Calicut) 等の諸國は鄭和の艦隊の最も屢々往訪した地であり、これらの諸國も鄭和の艦隊の歸航に伴つて、度々明へ朝貢してゐる。<sup>(16)</sup> 當時の南インドは沿岸にこれらの諸小國があり、内陸に Vijayanagar の大國があつた。沿岸の諸小國即ち西洋諸國は前に引いた山本博士の論證により明かな如く、元末の汪大淵やイブン・バットタの頃、既に Vijayanagar の勢力下にあつたのであるが、その後、洪武年間を経て、Vijayanagar の國力は愈々發展したから、鄭和の訪れた當時も依然として Vijayanagar に服屬してゐたことは疑ない。かく考へれば鄭和の南インド往訪が、當時その地方を支配してゐた Vijayanagar との間は何等の關係も生ぜずに終つたとは到底考へられないであらう。

ペルシアの歴史家として有名なアブドルラザーク (Abdur Razzāk) がチムールの子、シャールク王から派遣されて、カリカット (Calicut) に着いたのは鄭和の最後の遠征の行はれた宣德五―八年 (一四三〇―一四三三) より約十年後の一四四二年のことであるが、アブドルラザークの一行は翌年、Vijayanagar 王の求めにより、そこからトンガバドラ (Tungabhadra) 河畔にある Vijayanagar の國都に赴いた。<sup>(17)</sup> また十五世紀初めの東方諸國歴遊を以て名高いヴェニス商人ニコロコンチ (Nicolo Conti) はカリカットの稍々北に位するデリー山 (Mt. D'El) の附近に上陸し、鄭和の遠征期間 (一四〇五―一四三三) と恰も同時の一四二〇年頃、Vijayanagar を訪れたと言はれてゐる。<sup>(18)</sup> か

くの如く鄭和と同じ頃の使節や商人達は皆、南インド沿岸から、その地方の宗主國である Vijayanagar へ向つたのである。アブドルリザークもニコロコンチも Vijayanagar の王城の壯麗、宮廷生活の豪華、都市施設の整備、街路の雜鬧などについて語り、共にこの國の富裕なことに讚歎してゐる。<sup>(19)</sup>これは後來のポルトガル人の記述に於いても同様で、さればゴアを根據として、ポルトガル人はこの國と最も盛んに貿易したのである。鄭和の南海招撫も、この南インド諸國の宗主國を招撫しなければ、その目的を達しないであらうし、またその目的が言はれる如く單なる南海招撫でなく、南海貿易であつたとすれば、かゝる富裕な大國との貿易を無視する筈があらうか。

## 五

かく考へて史料をよく検討すると、明史 卷三百二十六 外國傳七に鄭和の招諭した甘巴里といふ國について左の如き記載がある。

甘巴里亦西洋小國。永樂六年（一四〇八）、鄭和使其地、賜其王錦綺紗羅。十二年（一四一四）、遣使朝方物。十九年（一四二二）再貢。遣鄭和報之。宣德五年（一四三〇）、和復招諭。其國王兜哇刺札、遣使來貢。八年（一四三三）抵京師。正統元年（一四三六）、附瓜（瓜の誤）哇舟還國、賜敕勞王。其隣境有阿撥把丹・小阿蘭二國。亦以六年、命鄭和齎敕招諭、賜亦同。

この甘巴里國とは一體、何處に比定したらよいであらうか。從來のこれに關する見解を擧げると、ロックヒル (W. Rockhill) 氏は甘巴里を以て、インド西北岸なる Cambay の音譯となし、瀛涯勝覽に見える坎巴夷と同一地であ

るとしてゐる。<sup>(20)</sup> ペリオ (P. Pelliot) 氏は坎巴夷を Koyampadi (今の Coimbatore) の音譯となすフィリップス (George Phillips) 氏の説に賛し、甘巴里は坎巴夷と同じく Koyampadi であると言ふ。<sup>(21)</sup> また藤田豊八博士・山本達郎博士や張星煥氏は甘巴里を以て、Comari 即ちインド半島最南端の Comorin 岬の地方に擬してゐる。<sup>(22)</sup> この中、甘巴里 Cambay 説は Cambay が西洋以外の地であるから、この點だけでも論外であらうが、要するに今日まで甘巴里が何處であるかについてはなほ定説がないのである。何れの説もたゞ音の相似する地を求めるのみで、別に決定的な證據を一つも擧げることが出来なかつたからである。

従來、不思議にも全く見過されて來たが、右の明史甘巴里傳の中に、この國の所在を明かにし得る確かな手がかりが含まれてゐると思ふ。それは國王の名前として見えてゐる兜哇刺札の四字である。兜哇刺札は現代北京音で tou wala cha であるが、これは Deva Raya の對音であるに相違ない。そして當時のインドで、Deva Raya という王は Vijayanagar 第六代の王 Deva Raya II の外にはゐなかつたのであるから、<sup>(23)</sup> この王を指すものであること間違ないと私は考へる。Deva Raya II の治世は西紀一四二四年より一四四七年に至る間であり、<sup>(24)</sup> 明史甘巴里傳に記す鄭和が宣德五年 (一四三〇年) に招諭し、この國の使者が京師 (北京) に抵つた宣德八年 (一四三三年) の當時、正に位に在つたのである。明實錄を見ると、宣德五年六月戊寅の條に鄭和が往使すべき諸國の一として甘巴里が擧げてあり、宣德八年閏八月辛亥朔の條に甘巴里國王の遣使朝貢の記事がある。たゞ實錄の右の條には甘巴里國王の名が兜哇刺札でなく、兜哇刺劄と書いてあるが、札と劄とが音通であることは言ふまでもない。Deva Raya II は Vijayanagar 歴代の諸王中、最も有能な君主の一人で、特に一三三六年から一四八五年に至るいはゆる Vijayanagar の第一王朝に於ける最

大の英主であつたと言はれてゐる。前に述べたニコロロンチやアブドルラザークが Vijayanagar を訪れ、その國家の偉大さに驚歎したのもみな此の王の治世中のことで、當時の Vijayanagar は頗る繁榮してゐたから、各國の商旅、使臣の往來する者が多かつたのは當然である。鄭和の招諭も實にこの際に行はれたのである。

中國の史料は甘巴里國の王名を兜哇刺札(劄)の外には傳へてゐないが、鄭曉の皇明四夷考と、これに基づいた茅瑞徵の皇明象胥錄の甘巴里國の條を見ると、永樂十二年にも國王兜哇刺查(札・劄と音通)が遣使朝貢したと記してある。前掲の明史甘巴里傳も亦、この年の朝貢を述べてゐるが、明實錄には永樂十二年に甘巴里國の朝貢記事がなく、翌十三年の九月癸卯の條に甘巴里國が朝貢した記事があり、十月癸未の條に甘巴里の使臣が歸國の途についた旨が見える。但し、王名は右の何れの條にも記されてゐない。よつて、四夷考や象胥錄の王名は何に據つたものか明かでないが、永樂十二年に朝貢したといふのは十三年の誤記であるかも知れぬ。何れにしても永樂十二、三年は西紀一四一四、五年に當り、Deva Raya II の即位した一四二四年よりも以前になる。しかし Deva Raya II の祖父で、二代前の國王であつた Deva Raya I の治世は一四〇六年より一四一八年頃まで續いたとされてゐる。<sup>(26)</sup> 故に永樂十二年、若しくは十三年に遣使貢獻したといふ兜哇刺查は Deva Raya II ではなく、Deva Raya I であつたと考へられよう。<sup>(27)</sup>

それでは甘巴里といふ國名は何に由來するものであらうか。從來の説の如く、これを Comari や Koyampardi の音譯だとしても、これらの地は Vijayanagar の盛時にはその勢力下に含まれてゐたから、國名として使用されたと強辯し得るかも知れない。しかし、これらはたと音譯として多少似てゐるといふだけであり、トンガバドラ (Tungabhadra) 河畔の Vijayanagar の本據から遙に隔たつた別の地で、國名として使用する理由が全くない。今や我々は甘巴里が

Vijayanagar であることが判明したので、Vijayanagar の本據に於いて、甘巴里の國名を比定することが出来るのである。私は甘巴里は Kampli の音譯であると思ふ。Kampli とは Annagoondy (Anegundi) 即ち阿難功德の東、約八マイルにあり、<sup>(28)</sup> Vijayanagar 國の盛時には Annagoondy と共に南北十一マイル、東西十マイルに亘つた廣大なその國都を構成してゐた地である。<sup>(29)</sup> A Forgotten Empire (Vijayanagar) の著者 Robert Sewell はインベンツータの旅行記や、十六世紀に於けるブーアドナガル (Ahmadnagar) の回教史家フイリシッタ (Firishita) の記録等には勃興前の Vijayanagar 王の祖先が Kampli 王、或は Annagoondy 王といふ稱號で見えることを指摘し、これは初め、Kampli や Annagoondy に城を築いてゐたのが、後に廣大な Vijayanagar の國都へ發展したことを示すものであらうと述べてゐる。<sup>(30)</sup> 實に Annagoondy と Kampli は Vijayanagar の本據なのであつて、だから、この名稱を以て、この國が呼ばれても不思議はない。明の記録に Vijayanagar が阿難功德國や甘巴里國として表はれるのはこのやうな事情によるものに相違ないと思ふ。

なほ明史甘巴里傳の冒頭には「甘巴里亦西洋小國」とあり、Vijayanagar のやうな大國を小國となしてゐる。しかし、この句は明實錄を首め、皇明四夷考等の甘巴里國に關する記載には見えない。故にこれは「亦西洋小國」とあることから知られるやうに、明史甘巴里傳の直ぐ前の加異勒 (Kayal) 傳の同じく冒頭に「加異勒西洋小國也」と書いたことより引きずられた筆の誤と見るべきもので、別に根據あつての記述ではないと思ふ。加異勒はマルコ・ポーロにも見える Cail (Kayal) で、南インドのマナル (Manar) 灣に臨む小國であるが、Vijayanagar をも小國としたのはその無知識を暴露したものに過ぎぬであらう。

明實錄によると、甘巴里國は永樂六年九月癸酉及び、宣德五年六月戊寅の條に鄭和の招諭すべき國として見えてをり、永樂十三年九月癸卯、同十九年正月戊子、宣德八年閏八月辛亥朔の各條に朝貢の記事がある。明史甘巴里傳にも記す如く、この招諭と朝貢はすべて鄭和の遠征に伴なつて行はれたものなのである。鄭和の遠征が宣德八年を最後に終結して以後、明の對南海政策は再び消極的となつた。かくて、正統元年（一四三六）に爪哇の使者が歸る際、その舟に附して、宣德八年來朝の古里・蘇門答刺・錫蘭山・柯枝・天方・加異勒・阿丹・忽魯謨斯・祖法兒・眞臘の諸國の使者と共に甘巴里國の使者をも歸還せしめたことがある外、明と南海諸國との關係は頗る疎闊となり、遂に Vijayanagar との交渉も斷絶してしまつたやうである。

以上によつて、鄭和の遠征と Vijayanagar との關係が明かにされたと思ふ。鄭和が招撫した數多くの南海諸國の中でも Vijayanagar は最も大きな國であつたのであるから、鄭和の遠征を説く際に、これは決して落してはならぬ事實であると考へる。然るに鄭和の遠征に關する記録として知られた馬歡「瀛涯勝覽」、費信「星槎勝覽」、鞏珍「西洋番國志」及び黃省曾「西洋朝貢典錄」等の何れの書にも甘巴里國に關する記載が全くない。たゞ瀛涯勝覽の古里國の條に坎巴夷といふ地名が見えるが、これは甘巴里の同一異譯と考ふべきでなく、甘巴里即ち Kampli とは別の地なのである。坎巴夷はフィリップス氏の如く Koyampadi に當てるのが正しいと思ふ。このフィリップス氏の坎巴夷 Koyampadi 説は最近、杉本直治郎博士によつて詳しく論證された所である。従つて、瀛涯勝覽を首め、これらの書は Vijayanagar のやうな大國について少しも述べてゐないのである。これは頗る不思議であつて、従來の論者をして明と此の國との交渉の事實を見過させる原因にもなつたのである。しかし、この疑問はこれらの書が鄭和の艦隊が往訪した國の全部を



残らず記載したのではないのを知ることによつて、水解するのではあるまいか。明實録や明史等に鄭和が招諭したと明記してあるにも拘らず、これらの書の何れにも記載洩れとなつてゐる國は甘巴里の外にも加異勒、阿撥把丹、沙里灣泥、急蘭丹、孫刺、麻林の諸國が擧げられるのである。

明初の洪武から宣徳にかけて行はれた南海招撫は東洋史上の顯著な事件であるが、その際、招撫を受けた南海諸國の中で、最も富裕な大國は Vijayanagar であつたのである。洪武の初、太祖が即位早々にして、最も遠い西洋へ使臣を派遣したのも、また永樂・宣徳の間、鄭和が數回に亘る大遠征を敢行したのも、共に Vijayanagar との交渉を重要な目的とするものであつたことを忘れてはならないであらう。

#### 註

(1) K. A. Nilakanta Sastri: A History of South India, Oxford 1955, pp. 253—300.

(2) 野獲編卷三十、西天〔阿難〕功德國の全文は左の如くである。

洪武七年、西天阿難功德國王ト哈魯遣講主必尼也來貢、并獻解毒藥石。詔賜文綺禪衣等物。古來不聞有此夷名、且會典朝貢諸夷不載其國。并金元諸史皆無之。但其時與和林國使全來、亦遣講主朝貢、獻方物及元所賜金玉銅銀等印。按和林爲元舊都、何以改稱國、必胡僧贖賞。并功德國亦僞造美名、天朝始妄聽之耳。

こゝに和林國師を和林國使と書き、和林國といふ國を考へてゐるのは勿論、沈德符の誤解である。

(3) 中略の部分は「明年、國師入朝、又獻佛像舍利、馬二匹。賜文綺禪衣」といふ文で、明實録洪武七年五月庚辰の條に基いてゐる。従つて、こゝに明年とあるのは誤である。

(4) Vincent A. Smith: The Oxford History of India, Oxford, 1932, pp. 231—299. The Cambridge History of India, Vol. III, Cambridge, 1928, pp. 377—403.

西天阿難功德國と甘巴里國（和田博徳）

- (5) Paul Pelliot: *Les grands voyages maritimes chinois au début du XV<sup>e</sup> siècle*, T P., 1933, p. 319.
- (6) 村上正二「明朝と帖木兒帝國との關係について」イヌヲト三。
- (7) 神田信夫「明初滇邊土司の設置について」東洋學報三五ノ三、四。
- (8) 「江南踏査」四〇頁、一四〇頁註。
- (9) 東洋學報二一ノ一、一〇四—一三二頁。
- (10) 前嶋信次「イブン・バットウータ三大陸周遊記」昭和二十九年 河出書房。二八五—六頁。
- (11) Robert Sewell: *A Sketch of the Dynasties of Southern India*, Madras, 1883, p. 103.
- (12) Robert Sewell: *A Forgotten Empire, (Vijayanagar)*, London, 1900, p. 300.
- (13) Henry Yule, Henri Cordier: *The Book of Ser Marco Polo*, London, 1903, p. 335. Friedrich Hirth, W. W. Rockhill: *Chau Jukua, St. Petersburg*, 1911, p. 98. 山本達郎「東西洋といふ稱呼の起原に就いて」東洋學報二一ノ一、一二二頁。
- (14) 佐久間重男「明朝の海禁政策」東方學六。
- (15) 山本達郎「東西洋といふ稱呼の起原に就いて」東洋學報二一ノ一、一二五頁。
- (16) 山本達郎「鄭和の西征」東洋學報二一ノ三、四。
- (17) Sewell: *A Forgotten Empire*, p. 73.
- (18) *Ibid.*, p. 81.
- (19) *Ibid.*, p. 88.
- (20) W. W. Rockhill: *Notes on the relations and trade of China with the Eastern Archipelago and the coasts of the Indian Ocean during the fourteenth century*, TP., 1914—1915, p. 83.
- (21) Pelliot: *Les grands voyages maritimes chinois*, TP., 1933, p. 290.
- (22) 藤田豐八「大小葛蘭考」(東西交渉史の研究)南海篇 八〇頁。

山本達郎「鄭和の西征」東洋學報二一ノ三、三八八頁。

張星烺「中西交通史料匯篇」第六冊、五一五頁。

- (23) Sewell: A Sketch of the Dynasties of Southern India, pp. 21—115. The Cambridge History of India, Vol. III, pp. 687—715.
- (24) Sewell: Ibid., p. 104.
- (25) Sewell: A Forgotten Empire, pp. 65—80.
- (26) Ibid., pp. 57—62.
- (27) Deva Raya の Raya は王といふ意味の梵語 Raja の南インド音であるが (H. Yule and A. C. Barnell: Hobson Jobson, London 1903, p. 754) 札・劄・查等の字は何れも ya よりも ja の對音に近いから、當時は南インドでも王を Raja と稱してゐたことを示すものかと思はれる。
- (28) Sewell: A Forgotten Empire, p. 17.
- (29) Ibid., p. 83.
- (30) Ibid., pp. 16—17.
- (31) 明實錄、正統元年閏六月癸巳の條。
- (32) 杉本直治郎「元代南海における貿易品としての西洋布——その用いられたる地方とその産地——」史學研究五六、一四—一七頁。